八重山諸島の考古学

９．パナリ期の概要

1609年の薩摩の琉球侵攻以降から琉球処分までの間を、「近世琉球」と称しています。ちょうどこの頃に、考古学的にも変化がみられることから、八重山諸島では、この近世期を代表する土器ーパナリ焼の名称をとって、パナリ期と呼んでいます。

まずは、このパナリ焼という焼き物について考えてみましょう。

（１）パナリ焼

１）パナリ焼と伝承

図 29　厨子として利用されたパナリ焼（与那国島）

新城島と関係の深い焼物に「パナリ焼」（図29）があります。考古学編年上の「パナリ期」もこれに由来し、おおむね琉球の近世に重なり、17世紀初頭から19世紀までと位置づけられています。パナリ焼は、一般的に竹富町新城島で19世紀中頃まで焼かれていた土器と説明されています。あわせて、その製作技法にも独特な解説がなされており、『沖縄大百科事典』から「パナリ焼」（新城1983）の項目を引けば、以下のような記載が見られます。

> 竹富町新城島で1857年（尚泰10）ごろまで造られていた土器質の焼物。新城島をパナリと呼ぶところからこの名称がある。その起源は明らかでないが、一説によると、昔、中国人が新城島に漂着してその技法を伝えたといわれる。その製法は一種独特で、蔓草やタブノキの粘液を土に混ぜて捏ねあわせ、轆轤を使わずに、手びねりで成形し、さらに蝸牛や貝肉の粘液をすり塗って形を整え、露天でカヤやススキの火で日用品のほとんどが造られており、王府時代は貢物として認められていたようである。（後略）

この解説が、一般的なパナリ焼の一般的なイメージでしょう。しかし、本当に、この説明だけで、遺物としてのパナリ焼が理解できるのでしょうか。

パナリ焼の「特徴」であり、「特異」な製法に、カタツムリの使用が挙げられます。しかし、仕上げの段階でカタツムリの肉（粘液）を塗ったとする解説や、土に混ぜたという解説など、その利用方法は引用者によって統一されているものではありません。

２）パナリ焼はいつ頃から作られたのか

パナリ焼の初現は、いつ頃になるのでしょうか。文献史料で、その明確な年代を知ることはできません。発掘調査で確認できるパナリ焼の初現は、17世紀初頭と考えられています。西表島上村遺跡（図30）の調査において（沖縄県教育委員会1991）、歴（原）史～近世にかけて上下層で異なる型式の土器出土を確認し、一緒に見つかる中国産陶磁器などの年代から17世紀という年代を得ました。中森式土器とパナリ焼が出土する層が、一部重なりながら見つかったのです。この両時期について、層序で流れを確認した数少ない遺跡であると言えます。

図30　西表島祖納上村遺跡の石積み

パナリ焼の初現については、文献などにもないため、明確に何年から焼かれたものと断言することはできません。しかし、17世紀以降に焼かれた土器である、ということは、遺跡からの出土状況で確認できます。

３）パナリ焼は新城島（図31・32）だけで焼かれたものか

土があれば土器が焼けるというものではありません。土器を焼くという行為には様々な作業が必要となり、もちろん、土を選ぶこともたいせつです。

土器を製作するには、掘ってきた土をそのまま利用することは、ほとんどできません。花崗岩が風化した土などは磁器土(磁器を焼く際に利用される土)になることからも、ある程度の粘性を持っています。しかし、そういった場合にも、土器製作の野焼きをする際には、混和材が必要となります。

安里武信は、「島の耕地が珊瑚礁ばかり露出しているのは、土地が流されたあとの該（骸カ）骨であることを知るべきである」と、島に土が少ないことを認識した上で、明和大津波との関係を指摘しています（安里1976)。その島の住民が、「土が少ないこと」を認識していることは重要です。あわせて、新城島には、水源もほとんどありません。

近年、パナリ焼そのものを胎土分析した事例もあります。西表の平西貝塚採集のパナリ焼片（図33）は、胎土分析の結果、胎土に利用された土が、新城島のものではない可能性が示されています（島袋2011)。パナリ焼を生産するにあたって、原材料となる土・焼くための木材等・最も重要な運搬にかかる技術と労力を考えれば、新城島でのみ焼かれたという考えは肯定しづらく、この結果は妥当なものと判断されます。

また、石垣島の喜田盛遺跡出土のパナリ焼の胎土には、石英や長石の利用が確認されています（石垣市教育委員会2004)。石英や長石は変成岩、火成岩に多く含まれるもので、石灰岩からなる新城島で産する可能性は低くなります。

先に紹介した平西貝塚採集の試料は、胎土からイネのプラント・オパール（植物珪酸体が土壌中の土粒子となったもの）が検出され、水田の土が一部利用された可能性も示されています。あわせて、リン酸値が高いという結果も得られています。

ところがもう一方で、新城島で焼かれた可能性を完全に否定することはできません。「パナリチィチィヤーミユンタ」という古謡の歌詞は具体的で、かつ、「新城島に窯跡や土を掘り出した跡がある」、との報告もあります（安里1976、野底宗吉氏作成資料)。

今後、分析数が増えてくると、どこの土でどのように焼かれたものなのか、産地の絞り込みが可能になってくると考えられます。

図31　新城島上地（右上）と下地（左下）

図32　新城島上地採集のパナリ焼片ほか遺物

図33　西表島採集のパナリ焼断面とその器面調整

＜参考・引用文献一覧＞

安里武信　1976『新城島』　私家版
新城剛　1983「パナリ焼」『沖縄大百科事典』下巻　p239　沖縄タイムス社
石垣市教育委員会　2004『喜田盛遺跡-真栄里新川線街路改良工事に伴う緊急発掘調査-』石垣市文化財調査報告書第28号　石垣市教育委員会
沖縄県教育委員会　1991「第Ⅶ章　調査の成果と今後の課題」『西表島　上村遺跡』沖縄県文化財調査報告書第98号　沖縄県教育委員会
島袋綾野　2011「パナリ焼―イメージの形成・制作・流通の謎」『石垣市立八重山博物館紀要』第20号　石垣市立八重山博物館
竹富町史編集委員会編　2013『竹富町史　第五巻　新城島』　竹富町役場
鳥居龍蔵　1953「私と沖縄諸島」『ある老学徒の手記－考古学とともに六十年』　朝日新聞社（2003年復刻　ネスト企画）